

母なる

宇宙とともに

I



塩川香世

母なる宇宙とともに
I

「ぶっ殺してやる、お前なんか消え失せろ、お前は目障りだ。」

「雑魚ども、どけ、あいつを殺すのは私だ、誰の力も要らぬ、田池、お前を殺してやる。」

「何が田池留吉の宇宙だ、何をぬかすか、ちゃんちゃらおかしいわ、私の宇宙こそ素晴らしい、私のパワーのほうが大きい、田池、死ね。」

私の地獄の蓋が、今世、開きました。田池留吉という一人の人間により、地獄の釜の蓋が大きく開き、白日のもとに引きずり出された感覚でした。最初、それが悔しくて腹立たしくてたまりませんでした。しかし、それが、私の宇宙への軌跡の始まりだったのです。

はじめに

私は、二〇〇六年八月に（株）かんぼうサービスさんから、「ありがとう」という本を出させていただきました。読んでいただければお分かりと思いますが、その内容は、私自身の学びへの軌跡きせきを綴ったものでした。学びとは、日々の生活の中で、自分の心を見ることが、私には、言えます。

では、自分の心を見るときは、どういうことなのかということですが、そのことを主眼にしたセミナーが、実は約二十年間開催されてきました。大阪府立高等学校の校長の職を退かれた田池留吉氏を中

心に、過去、日本各地で数多くのセミナーが開かれてきました。冒頭にあるのは、そのセミナーの主眼である心を見る一例です。

セミナーにおいて、私自身の心から噴き上がってくるエネルギーを、言葉で表現したものです。私は、セミナーでの数え切れないほどの心の体験を経て、今世、ようやく、「私は間違ってきました。真つ黒な宇宙を広げてまいりました」ということを、本当に心で知ったのです。

セミナーの集約として、田池留吉著「意識の流れ―アルバートとともに―」が二〇〇四年二月に、また、拙著「ありがとう―意識の流れ姉妹編―」が二〇〇六年八月に出版されて、今現在に至っています。学びの趣旨^{しゅし}については、ここでは省略させていただきますが、そ

の二冊の中で詳細に記されていますので、よろしければご参照ください。

結論から言いますと、冒頭にありましたように、誰一人例外なく、すさまじいエネルギーを心に抱えています。日々の生活の中で、自分の心を見ていくことによって、すなわち、自分自身の思いの世界を丹念に追っていくことによって、そのことが分かってきます。自分のすさまじい思い、エネルギーを知っていくのです。自分を知っていけば、やがて、真実の波動の世界を感じていきます。同時に、本当の自分と出会っていくことができます。そして、「人はなぜ生まれてくるのか」、「なぜ死んでいくのか」も、自然に分かってきます。そういった過程を、私自身は、「ありがとう」の本の中で、そのま

まストレートに綴っていったつもりでしたが、執筆当時より少し時間が経過した今、もう少し自分なりに掘り下げて、筆を進めていきたい心境になりました。この思いを大切に、パソコンのキーを叩いていくことにします。喜びで、どんどん自分の中から出てくる思いと対面していきたいと思っています。

さて、私のテーマは、「ありがとう」の中にも記していますが、「愛」と「死」です。そのテーマについて、それを掘り下げるとき、切っても切れないものがあります。それは、今は殆ど^{ほとんど}の人が忘れ去った思いであり、しかし、誰もが心の奥底に眠らせている思いです。その思いを、ここでは「母の心」と呼ばせていただきますしうか。

一口に「母の心」と言いましても、お腹に子供を宿し、そして、この世に誕生させ、大切に育てていく過程の中で感じる母性とか母性愛とは、少し趣を異にします。おもむき こともちろん、「母の心」は、母性、母性愛にも通じていますが、そういうものを遥かに超えた世界を指していると思うてください。私は、自分の中で、その世界を見つめていきたい、その世界から語っていききたいと思っています。

それでは、母性とか母性愛を超えた「母の心」とは何かということですが、そちらのほうに思いを向けていけば、唐突ですが、「宇宙」という言葉が浮かび上がってくるのです。

「宇宙」という言葉から、様々なことを連想されると思います。

私自身、宇宙に思いを向ければ、私はこの地球に、どこかの星か

らやってきたという思いを、ずっと以前より感じてきました。そのことを三次元的にとらえれば、何億光年の彼方から、宇宙船に乗ってという、さながらSF映画の中の一シーンを想像されて、未知なる宇宙への思いをかきたてるかもしれません。しかし、私が感じているのは、そのようなものではなく、次元を超えてきたという感覚なのです。

例えば、今のこの世界は、縦、横、高さの立体感がある三次元の世界ですが、その感覚でとらえる宇宙と、私が感じている宇宙は違っていると思います。宇宙とは、太陽系の惑星云々の形の世界ではなく、波動の世界なのだと思います。その宇宙とは、実は自分自身であり、私は宇宙そのものであり、宇宙とはエネルギーなのです。

すなわち、私はエネルギーであると感じています。

その点を踏まえて、本書は、以下、いくつかの題材について、母の心に思いを向けながら、心に上がってくる思いを綴っていく形式とさせていただきます。取り上げる題材は、学びに沿ったものもありますが、ふと思いついたものもありますので、本書のどのページから読まれてもいいと思います。それよりも、その題材について、あなたが自身がどのように感じられ、また思われているかを、自身自身に問いかけていっていただきたいのです。

そのようにして、読み進めていくうちに、あなたの心に何かが伝わっていくと思います。それを私は波動だと言っておきます。もつと言え、ば、「母なる宇宙」からの波動を心で感じていかれると思います。

す。何気ない題材を通して、私はその波動をお伝えしたいと思っています。

ところで、本書の題名から、どのような思いを感じられましたでしょうか。宇宙に興味がある人もたくさんおられると思います。宇宙のパワーが大好きな人も多いのではないのでしょうか。しかし、私は、母の心を忘れ去った心で、宇宙に思いを向けていくことの危険性を強調したいと思っています。

本書から、まず、母の心を感じていくことが一番大切なことだということ、分かっていただければ充分です。それが基本です。従って、本書は、宇宙を本当に自分の心で知っていくための入門編だと、考えていただいていいのではないのでしょうか。そして、そう

いう状態で、さらに宇宙からのメッセージの本編を待っていてくださいと、付け加えておきます。

まず、本書を通して、母の心と宇宙が繋がっていることを知っていつてほしいのです。宇宙は、私達にこれから大きな影響を与えていきます。

それでは、「宇宙とは、いったい何なのか」、「宇宙が私達に及ぼすものとは、いったい何だろうか」ということになつてきますが、それを探求していくためには、まず、自分の中に本当の意味での母の温もりを、蘇らせることが第一なのだというのを忘れないでください。身近なところから、その方向へ思いを向けていつていただけたらと思います。ありふれた日常から、宇宙を感じていつてほしい、

宇宙を思うことをしていつてほしいと思っています。宇宙を感じる
こと、宇宙を思うことは、母の思いを感じること、母を思っていく
ことです。

「宇宙は遠くにあるものではありません。宇宙は自分達の心の中
にあるのです。」

その「母なる宇宙」からの思いを、いっしょに聞いていってくだ
さい。

さて、思いを今、自分のごく身近な周辺に向けてみましょう。

人は、みんな心の中に暗闇を抱えています。日々、目にしたり、
耳にするニュースは、そのことを示しています。身震いするような、

目を覆い、耳を疑う事件が、次から次へと出現してきます。許せない、何でもこまでするのか、怒りの矛先をどこへ向ければいいのか、その責任はどこにあるのか、問題解決を叫ぶ人達も、実はそれが自分達の心の世界のことなのだということには、思いも及びません。

しかし、それが現実なのです。誰がではなく、また特定の特殊な人種がというものでもない、私は思っています。

大切なもの、自分の原点を忘れ去った人間の心の中から出てくる闇の世界が、ある時には、弱い者いじめになったり、児童虐待になったり、営利誘拐、児童買春、親殺し、子殺し、保険金殺人、おれおれ詐欺、靈感商法、詐欺商法、収賄贈賄しゅうわいぞうわい、談合汚職、臓器売買、援助交際、集団暴行、麻薬密売に麻薬中毒、その他諸々の事件と

なつて、毎日毎日、世間を騒がせています。しかし、それもほんの数日で、やがて、そのことは人の間から消えて、新たな事件へと世間の目は向けられていつているようです。

確かに、その事件、事故等の当事者には、決して忘れられない記憶となつて、心に残留していきます。たとえば、加害者となつた側を裁判にかけて、仮に極刑を言い渡されても、被害者側には、心の禍根として残ります。被害者の人権を蹂躪した加害者が、堂々と人権を主張していく場合も往々にしてあり、心中は複雑でしょう。一応は結審した事件等も、当事者達の心の中は、依然として、それらを引きずつたままなのではないでしょうか。また、事態によつては、最終的に、やはりお金によつて決着をつける以外にないのかもしれない

ません。お金に蠢く^{うごめ}思いは、例えようもないほどのエネルギーですが、それしか方法がないというのが、今の世の中の悲しさかもしれません。

また、日々の生活の中では、熾烈^{しれつ}な受験戦争や経済戦争が続いていますし、実際に武器弾薬が飛び交い、多くの人命が犠牲になつている現実や、核の脅威^{きょうい}にさらされている現実に目を向ければ、ひとつの家庭から世界中に至るまで、今や戦いのエネルギーが蔓延^{まんえん}していることを感じます。それを、人類は発展、進歩、繁栄と位置づけるのでしょうか。戦争のない平和で明るい社会を作り上げていくために、人類は戦争を起こしていきます。この矛盾を、どのように思われますか。

確かに、時代の流れ、時の変遷^{へんせん}により、人々の考え方も変わります。社会との繋がりも、互いと互いの関係も、より複雑になっていくでしょう。その中で、互いが互いの立場を尊重し、理解し合いながら、互いに利益を追求していこう、人類の幸福と繁栄のために、充分に話し合いの場を持つとう、知恵を出し合っていこう、その姿勢は大切かもしれませんが、本当のところどうなのでしょう。果たして、そう、うまくいくのでしょうか。

例えば、同じテーブルにつき、互いを認め合うことが、本当に可能ならば、正義の名のもとに人を殺し、人々の生活空間を脅かすような行動には出ません。最初から、内外に戦いの意思を示しながらでは、話し合いのテーブルにはつけないと思います。真の政治家で

あり、国家を束ねる器であるならば、まず自国民の声を真摯に受け止めていくでしょう。しかし、己とその一族の栄耀栄華を、自国民の犠牲の上に成り立たせていくといった構図が出来上がっている中で、いったい、どのような国家的レベルの話し合いがなされていくのでしょうか。

また、みんな、それぞれに既得権を守り、それを侵そうとするものを、組織ぐるみで阻止しようとしていく体制も、まだまだ日本の国においても、根深いものがあると思います。汚い部分が白日のもとにさらけ出され、うまい汁を吸っていた輩も後を絶ちません。一方では、クリーンを強調していても、やはりお前もかというほど、もう今の世の中、お金に狂っていると表現しても、決して言い過ぎ

ではないと思います。

その経済環境、社会情勢の中で、どのようにそれらのものに関わって、いかに生きていけばいいのか、みんな暗中模索の中で、互いの立場から論じ合っています。その道の専門家の人達が様々な意見を述べています。彼らには、豊富な資料も、経験も、実績もあり、広い視野から語る内容は、もっともらしく聞こえますが、それがそのまま問題の中枢にまで届くかといえば、はなは甚だ疑問です。いえ、私はそんなことは絶対にないと断言できます。

このように、世の中は、今、その水面下で激しく動いています。その水面下の動きが、ポツ、ポツと頭を出していることが、様々な自然現象や人的現象に現れているのです。もうすでに、その動きは

始まり、いよいよ、これからだという時期に差し掛かっていると思います。これから、さらに世の中は混沌としていきます。事態は、もう、そういう局面を迎えています。

だからこそ、それぞれが心の奥底に眠っている母の思いに触れていかなければならない、またこれから、そういう方向に流れていくだろうと、私は感じています。

《目次》

はじめに

3

- ① 生まれてくることは 24
- ② 母親の存在を忘れ去りました 31
- ③ 最後は、責任転嫁です 37
- ④ 大人になり切れない大人 43
- ⑤ 血の繋がりと歪み^{ゆがみ} 47
- ⑥ 嫁姑の確執^{かくしつ} 50
- ⑦ 死んでいくことは 55
- ⑧ 自分の亡骸^{なきがら} 62
- ⑨ 人間不信の時代 66

⑩	男と女	70
⑪	過去世をもっと大きくとらえてください	73
⑫	転生	78
⑬	自分を繋ぐとは、どういうことでしょうか	83
⑭	来世が語ってくることを信じますか	87
⑮	宗教の世界は、まもなく崩れ去っていきます	92
⑯	結婚、出産、子育てを通して、何を学ばれましたか	97
⑰	殺人の背景にあるものは	102
⑱	憎いのはガン細胞ですか	106
⑲	絆 きずな	110
⑳	お金のパワー	114
㉑	一度きりの人生	117

② 仕事人間は、気付けば仕事中毒になっています

122

③ 介護 130

終わりに 134

④ UFO 137

⑤ 地球 140

⑥ 宇宙への軌跡^{きせき} 143

追伸

母なる宇宙への思い 146

母なる宇宙からの思い 152

母なる宇宙とともに
I

①生まれてくることは

生まれてくることは、どういふことでしょうか。

あなたは今、お母さんに産んでもらって、そこにいます。あなたの誕生を誰よりも喜んでくれたお母さんを、あなたは知っています。もちろん、お母さんのお腹なかから生まれてこれたことを、あなた自身も大変喜んでいた時があったのです。

お母さんのおっぱいを吸って、お母さんに抱かれて、ただ安らいでいた時が、どなたにもありました。今は、自分の力で生きてきたと自負している社会的に立派な人も、もとはと言えば、お母さんが

いたからこそ、です。

その原点、言うなれば、自分の原点を殆どほとんの人は忘れてしまっています。そして、忘れ去るだけならまだしも、そのお母さんに対して、どれだけの思いを吐いてきたのかを自覚している人は、また皆無に近いかもしれません。

ただし、お母さんが原点だと言われても、そのお母さんというのは、あなたが日常的に接してきたお母さんのことを言っているのでは、ありません。

所謂いわゆる、あなたのお母さんは、あなたと同様に、色々な癖もあり、愚かな部分も多々あります。また、大抵の母親は、あなたを、「私の子供だ、私が産み育てた大切な我が子だ」と称して、支配の思いや、

牛耳^{ぎゆうじ}るエネルギーを容赦なく出してきます。もともと、母親は決して、それが支配や牛耳^{ぎゆうじ}るエネルギーだとは思っていません。「みんなあなたのためだ」と、そして、「それが母親の愛情だ」と思い込んでいるから、自分の中ではよしとしている部分があります。本当はそれが愚かなのですが、愚かだということが分からないのです。

しかし、そのこととは別に、お母さんから厳然^{げんぜん}として流れるものがあります。その愚かな母親の本当の思いに、あなた自身が本当に触れていったなら、あなたは間違いなく変わっていくと思います。それは、あなたを我が所有物とみなしていく思いではなく、あなたをこの世に送り出せたことをただ喜び、ただただ、あなたの幸せを願っている思い、波動です。

あなたがどんなに罵詈雑言^{ばりぞうごん}を吐き、無理難題を突きつけても、あなたは今許されているから、そこに存在しています。あなた自身の頑張り、努力などで、今の地位、名誉、財産等々を築いてきたと本当に思っておられるなら、それはあなた自身があまりにも傲慢^{ごうまん}ではないでしょうか。

もつとも、今すぐに傲慢^{ごうまん}だと認めることは難しいと思います。しかし、いつの日にか、あなた自身に「はい、そうでした。私は傲慢^{ごうまん}でした。お母さん、申し訳ありませんでした」と、伝えてくれる自分に出会えると思います。

その時に、あなたは、お母さんから厳然^{げんぜん}として流れてくる思いに、ただただ涙、涙だと思います。その時、あなたは、あなた自身の心

で、日常目にしてきた母親でない母親の存在を知り、その存在から来る波動を感じていかれると思います。何とも言えない温もりと安らぎを、感じられるだろうと思います。そうなった時に、母の愛は無条件に自分を包んでくれていたことが喜びとして、心に広がっていくことでしょう。

まず、そのような母親の本当の思いに支えられて、どなたも生まれてくることができたことを、信じていってください。それが、自分自身の原点です。

ところで、子供は親を選べないということが、世間の通説としてあるようですが、本当はそうではありません。きちんと、あなたは母親を選んできました。選んできたというよりも、お願いをしてき

たのです。「私を産んでください」と願いを出したのです。肉体というものを、どうしてもあなた自身が必要としたからです。お母さんに産んでもらうということは、自分に肉体をもらうということです。みんな、そのようなことは、すっかり忘れ去っていきます。ほぼ一〇〇%の確率です。そして、その思いに立ち返るために、この世に産まれ出た瞬間から、様々な苦勞が始まっていくのです。しかも、原点を抜きにしているから、人生は重い荷物を背負って歩むものである、人生は苦である、言い伝えられてきたことを信じてしまします。鵜呑みにしていくのです。この世には、間違っただけで伝えているものがたくさんありますが、私は、このことは、最大の過ちだと思っています。

生まれてくることは喜び、人生は喜びです。

皆さん、子供の誕生を喜び、祝います。それは、誕生を喜ぶこと
によって、「これからの様々な出来事を通して、どうぞ、本当の自分
自身に目覚めてください」というメッセージを、親も子も互いに確
認しているのです。

そして、その人にとって、本当の誕生日とは、「私は、生まれて
くることができたこと、それだけが喜びです。お母さん、ありがと
う」、そう思えた時です。そこからが自分のスタートなのだと思います。
そのスタートラインに立たずして、本当のことは何も分から
ない、私は今、そう思っています。

② 母親の存在を忘れ去りました

「私に肉体をください」、そう願って、その願い通りに、あなたは両親のDNAを受け継いだ細胞のひとつひとつに支えられて、お母さんのお腹なかの中で、この世に出ることを喜びで待っていました。お母さんの子宮の中で、お母さんの肉体細胞を通して、様々な影響を受けて、あなたは喜びいっぱい、この世に出ていくその日を、今か今かと待っていたはずですよ。

しかし、たとえば、お母さんのお腹なかから出る前に、あるいは、出てからほんのしばらくして、その細胞達が動いてくれなくなっただし

ても、あなたは、きっと、「よかった、嬉しい、ありがとう」という思いを流すはずです。なぜならば、ほんのしばらくでも、お母さんのお腹^{なか}にいたからです。安らいで何の不満もない、ただ喜びだけの時間と空間を、あなたは持ったからです。その時、あなたは、お母さんの温もりの中に包まれている自分自身を感じていました。母親の存在を、あなたは充分に感じる事ができたのです。

母親という存在が、自分を受け入れてくれた、この事実は、無事肉体をこの世に送り出すことができて、またできなくても、変わらずにありました。そのことを感じているあなたは、たとえば、この世に肉体を持って現れることはなくとも、「お母さん、ありがとうございます」と告げて、お母さんのお腹^{なか}から喜びで、姿を消してい

くのです。

産まれてくるはずの我が子を流産したり、また死産であったり、産まれてすぐに死んでしまったりして、嘆き悲しむのはむしろ、母親の側がわかもしれません。

このようにして、生まれてきたはずでしたが、生まれてくる意味も、母親の存在も、成長するにつれて、きれいさっぱり忘れていきます。それで自分の人生を生きていこうとしても、山あり谷ありの人生を自分の思う通りに、乗り切っていけるものではありません。山も谷も、実は自分の計画でした。そして、どのように通過していくかも、自分で設定してきたはずでした。

しかし、肉体をもらうことを願ってきた思いを忘れ、自分で計画

してきた環境だということも忘れ、

「私はこんなところに生まれてきたくなかった。」

「なぜ私を産んだのか。」

「なぜ私の母親は、あのような母親なのか。」

と、不足、不満の思いはみんな、目の前にいる母親を目掛けて攻撃していきます。

厳しい環境であればあるほど、攻撃の勢いは強いものです。また、そうでなくて、例えば、人も羨むうらやような恵まれた環境であっても、どこかに不足、不満を探し出しては、その思いを母親にぶつけていくのです。そのようにして、どなたも、自分の目の前にいる母親に対して、自分の思いがストレートに飛び出ることを体験していきま

す。

「なぜ、母親には、自分の思いがストレートに出るのだろうか。」
不思議に思いませんか。皆さん、小さな頃は、母親に対して、
散々好き勝手なことを言ってきたではありませんか。

しかし、母親は、甘えて、駄々をこねても、結局は自分を受け入れてくれたはずで。時には厳しかったり、叱られたりということもありますが、それも父親がそうするのでは、どこかが違うことを感じていました。それは、誰が教えるわけでもないけれど、みんなお母さんとはそういうものだ、心のどこかで知っているからだと思っています。そうです、へその緒が繋がっているのは母親です。そして、へその緒を切ったその時から、母親の存在をみんな忘れ去つ

ていくのだと思います。

③ 最後は、責任転嫁です

夫も妻も、親も子も、いえ、人間全部が間違った方向を向いて、自分達の幸せと繁栄を求めていきます。そして、今、自分達が求めてきた結果が、次から次へと形となつて出てきています。

しかし、自分達が、間違つた方向を向いているとは分からずに、なぜこんなに様々な犯罪や不祥事や事件、事故などが起こつてくるのかと論じ合うばかりで、それでは、当然結論は出せません。そして、よもや自分達が間違っているとは思わないから、誰もその根本に注目することはありません。間違いの根本を知らないから、注目

することなどできなくて、当たり前です。

答えは、簡単です。しかし、その答えを本当にそうだと分かる人は、今はまだ皆無に近いです。だから、いくら再犯防止策を考え提案しても、これからさらに犯罪も事件等もエスカレートしていくことは明白です。特に、子供はどんどん死んでいくし、犯罪の低年齢化がさらに進みます。お金がらみの事件や不祥事も後あとを絶ちません。これからは、お金が人々の心を蝕むしばんでいく様さまを、さらに鮮明に表していきます。

ところで、事件等が起きるたびに、その道の専門家達が色々論じ合いますが、どのような場合も、これが原因だと決定付けられないのではないのでしょうか。実際には、原因は何か分からないのだと

思います。しかし、その道の専門家達だから、分からないとは言えないでしょう。そこで、様々な要因が複雑に絡^{から}まっていると逃げます。また、原因を追求する術^{すべ}は知らないけれど、責任の所在を明らかにしようとするのです。それによって問題解決を図ろうと思うのです。しかし、本当はそれすらも分からないのです。だから、明らかにしようとしながら、どこかに責任を押し付けるだけです。結局はどこかに転嫁していきます。

そもそも原因があるから、条件を整えば、それが形になって現れてくるだけです。その形になって現れてきた部分にだけ着目して、なぜこんなことが起こるのかと語り合っても、埒^{らち}が明きません。社会が悪い、どこそこが悪いと、責任を互いに転嫁している間は、何

最後は、責任転嫁です

にも気付けないでしょう。そこで、「母の心ですよ。みんな忘れて
いるでしょう。なぜ私達は生まれてきたのでしょうか」などと、ど
れだけ力説しようが、そんなものに足を止めて聞く人など殆どいま
せん。「こうすれば、ガンが治りますよ。お金が儲けられますよ」と
いう話ならば、聞くに値すると目の色を変えて寄ってくる人もいる
でしょう。

しかし、「心を見てごらん。苦しんでいるあなたが間違っている
のですよ」などと言われて、「そうでしたか。私が間違っていたので
すか」と、そうおいそれとは行きません。それよりも「なぜ私が間
違っているのですか。私がいったい何をしたと言うのですか。苦し
んでいる私は被害者ですよ。なぜ被害者が悪いのですか」と、目を

剥いて食い下がってくるでしょう。みんな自分が正しくて、こうなったのはあいつが悪い、こいつが悪い、行政がなっていない、などと好き勝手なことを口にするばかりで、その中の誰一人として、自分を産んでくれたお母さんに対して、どのような思いを広げてきたかなんて、考える人はいないと思います。

しかし、原因はそこにあるのです。誰一人例外なく、母親の存在を欠落した状態だから、自分自身の間違いに、心から気付いていくことはできないのです。

「子供を産み育ててきたお母さんでさえ、母親の存在を知らない。」

「母親になっても本当の母の心を知らない、欠如している。」

そういうことだと思います。

母親にすべての責任があると言っているわけではありません。ただ、お母さんという存在は大切な存在なのですよということを、もつと子供を産むお母さんに知ってほしい、そう思うだけです。子供が欲しい、子供を産みたい、それだけではダメだと思います。それだけでは、子供を産み、子供を持つ喜びよりも、むしろ、苦しみが増大していくことになるかもしれません。

④ 大人になり切れない大人

頭でっかちで、大人になり切れない大人が、うようよしていると
思いませんか。大人と一口に言っても、その定義が何であるのかと
いうことになりますが、要するに人間のレベルが低下している、幼
稚だということでしょうか。大人になり切れないというのは、子供
のような無邪気さを残しているということではなくて、自己中心的
で、身勝手に、自己主張には優れていても、その責任の所在をうや
むやにしてしまう、そのような人だと思えます。

そのような人達が、会社で働き、また結婚して父親となり、母親

となつていきます。結果どうなるのか、それが今、日本の国ひとつを取り上げても、毎日毎日、世間を騒がせている事件、不祥事に現れてきていると思います。

たくさんの方が情報が溢れている世の中に、少子社会の流れが、どんな大人になり切れない大人を量産していきます。身体からだと頭だけが成長し、心は未発達、まさにアンバランスの人間です。そのような人間が世の中に溢れていくのだと思います。身体からだは、生活環境が豊かになり整ってくれば、自然に成長していきます。また頭かみのほうも、それなりに受験戦争をくぐり抜けてきていますから、鍛えられていきます。しかし、心のほうはどうでしょうか。みんな心とは何かを知らないのではないのでしょうか。

そもそも、心の世界は、宗教学者はもちろん、学問的なところから解き明かすことはできません。また、科学的な見地からも、心の世界を語ることなどできないのです。

確かに、単に嬉しい、悲しいなどという思いを語ることは、いくらでもできるでしょうし、心理学的に思いを分析することも可能かもしれません。しかし、思いを語っているからといって、心を語っていることにはならないし、その思いを分析して、それで心の世界というものが分かることにはなりません。

なぜならば、思いを語る人も、思いを分析する人も、心を形の世界から見ているからです。心は、心の世界にあることを、彼らは知らないのです。結局、みんな心の世界を頭でとらえようとしています。

言葉、態度など形に表れているものに重点を置き、そこから心の世界を推し量り、または分析しようとしています。一応それで、ひとつの宗教書とか指導書とか呼ばれるものは、出来上がっていくと思います。この世に氾濫はんらんしているものは、その類たぐいのものです。

世の中は、今、その程度の情報を、いっぱい頭に詰め込んで、対処していこうとする風潮だと思っています。しかも、周りには、大人になり切れていない大人がいっぱいいます。アンバランスな人間に、アンバランスな情報を与えて、よりいっそう世間を混乱させていく風潮のように思えて、仕方がありません。

⑤ 血の繋がりと歪み^{ゆが}

血の繋がりが、これは人間独特のものだと思います。犬や猫などに比べると、人間にとって、それは大変な繋がりのように見受けられます。例えば、親子には、血の繋がりがあります。夫婦関係は契約です。解除すれば赤の他人です。

それに比べて、親子の縁というものは、そう簡単なものではありません。勘当を言い渡しても、切っても切れない繋がりがあります。ドラ息子でも気ままな娘でも、我が子は可愛いものです。親は子供のためなら、特に母親はお腹^{なか}を痛めて産んだ我が子という思いが本

能的にありますから、その我が子のためならば、どんなこともする
かもしれません。執着と親本来の愛情が混濁こんだくしてしまつて、子離れ
できない親、親離れできない子供が、歪ゆがんだものを生み出していく
結果となつていつているように思います。繋がりが強いだけに歪ゆがみ
もまた大きくなつていくのでしょうか。

例えば、簡単に我が子を殺したり、簡単に子供が親を殺したりの
昨今です。親子間で殺人が行われるなど、異常な状態です。ひと昔
前なら、もしそのようなことがあれば、それは大変なことでした。
それが今では、日常化しています。このことだけを取り上げても大
変な時代になつてきたことが分かります。また、親子間の性的暴行
を含む虐待などは、氷山の一角だと思ひます。そして、片方では、

過保護教育が過熱しています。これも親子間の歪^{ゆが}みを象徴しているものだと思います。

本当に強い繋がりであるならば、このようないびつな関係は生じてこないと思います。

「血の繋がりとは何なのか。」

「血を分けた存在とは何なのか。」

「なぜ血の繋がりを断ち切ることは難しいのか。」

そこに根本的な間違いに気付くヒントがあるように思います。

⑥ 嫁姑の確執^{かくしつ}

親子の固い繋がりの中に、赤の他人が割り込んでくると、そこにまた人間のドロドロとしたドラマが始まります。今も昔も変わらずにある、嫁姑の確執^{かくしつ}はその最たるものです。昔から、嫁と姑はひとりの男性を巡って、戦いを起こしてきました。各々^{おのおの}の中に蓄えてきた戦いのエネルギーが、そういう形で現れてくるのです。

それがおもしろおかしく小説やドラマなどになって、多くの人々の共感を得ます。みんなそれを読んだり観たりして、一応、安心するのだと思います。私だけではなかった、みんな同じところで苦し

んだり悩んだり、泣いたりけんかしたりしているのだ、そして、それが人生なのかもしれないと、それですべてをごまかしていくのです。あなたは最後まで、人生をごまかしていくのですか、それでは本当の幸せなどには巡り合えないですよと、数ある小説の中に、ここまで書き下ろしたものがあってもいいと思いますが……。

嫁姑の確執^{かくしつ}も、時代の流れによりその趣^{おもむき}は変わりつつあります。姑にいびられて、泣き暮らしていた嫁が、力をつけて夫を尻に敷き、堂々と姑と渡り合う、時代の流れとともにそのパターンは変わってきました。しかし、戦いの火花を散らす地獄の世界には変わりはありません。

嫁姑は、いつまでもその地獄から足を洗えずに、同じところで苦

しみ続けている仲間だと、どちらか一方が気付いていけばいいと思います。夫婦の関係と同様、嫁姑の関係もまた、合わない者同士、敵味方が組んでいくということです。戦いが起こって当然です。そのエネルギーを引き出すために、そういう結びつきをしていくからです。

戦いのエネルギーは、もともと、それぞれが自分の中に蓄えてきたエネルギーです。今、互いを通して、そのエネルギーを確認しようとしているのだから、それは外に出していくほうがいいのです。中に押し留めていても、やがてどこかで爆発していきます。外に出して、自分達で眺めながら、互いに傷つき合いながら、何かに気付いていけばいいのではないのでしょうか。その授業料は、時により人

によつては、高くつくかもしれませんが、それでも、自分の中で何かに気付いていけば、それでよしだと思います。「互いが互いの教材だった、教材になつてくれた」、このように思いを変えていく側^{がわ}が、きつと幸せを感じていくと思います。

反対に、いつまでも戦いの中にあれば、自分を自分で不幸にしていくだけです。本当の意味での仲良し嫁姑は、互いのエネルギーを出し切つた末に、誕生していくのだと思います。

このようにして、時は移り、時代は変わつても、嫁姑の戦いは、いつ果てるともなく続いてきました。そして、嫁姑の關係に限らず、どのような關係であつても、絶えず、相手を自分の外にとらえる心では、戦いは続いていきます。戦いのエネルギーは自分の中にある

ことに気付くまで、形を変えて続いていくのです。そのひとつの形
態が、嫁姑ということに過ぎない、私はそのように感じています。

⑦ 死んでいくこととは

死んでいくこととは、どういうことでしょうか。

生まれてきた人間は、必ず死んでいきます。不老不死の薬はありません。どなたも、やがて肉体が朽ち果てる時がやってきます。これは、みんな納得していただけると思います。

問題は、人は、生まれてから死んでいくまでの間に、本当に自分がすべきことを見つけたか、すなわち、自分の仕事を見つけたかということにあると思います。

これこそ我が天性の仕事だと、様々な分野で自分の情熱を傾けて

おられる方も、本当にそれが天性の仕事だと言い切れますか。そのような仕事とは別に、もっと他に自分が成すべきものがあつたのではないだろうか、やはり、そのようなことをふと思うのは、人生も晩年を迎えた頃でしょうか。

若くて血氣盛んな時は、自分の能力を発揮できる場、チャンスに恵まれば、大変有望な実りある人生だと、自己満足し、社会も評価します。当然、それなりの地位、名誉、財産、人望は集約できるでしょう。

そして、そういう人が亡くなっていけば、一段も二段も高く、すぐれた人物像が描かれていき、いついつまでも語り継がれていくかもしれません。その人を知る人達の間では、ああだった、こうだっ

たと、もてはやされて、語り継がれていくでしょう。やれ生誕祭だ、何とかの神様だとか言って、お祭り気分で浮かれていくことだと思います。

しかし、それは、現に生きている人達の側がわのことで、当の本人にしてみれば、その肉体を捨てた、すなわち、死の瞬間を迎えた時点で、そういった輝かしき栄光は、消え去っていきます。華やいだ雰囲気は、その人が肉体というものを身にまとっている時に限られます。

本人は、それどころではありません。肉体を脱ぎ捨てた瞬間に、そんな生前の華やかな雰囲気とは似ても似つかない、重苦しい世界を味わっていくからです。呼べども叫べども、その重い苦しい重圧

が覆いかぶさってくる、これが肉体を持っている間に、本当のことを知らずに、存在してきた人間の実情です。

死んであの世から、自分の今の世界はこんな世界だと語ることはありません。語ることなどできないからです。天国に安らかに召されてなど、もつてのほかです。

では、死んでいくことは苦しみなのでしょうか。なぜ苦しみなのでしょうか。

そもそも、私達は苦しいから生まれてきました。苦しみから自分を救い出そうと生まれてきたのです。その出発点を知らずに生き、そして死んでいけば、死んでいくことは確かに苦しみに違いありません。

生まれてきた殆ど^{ほとん}の人は、人生の出発点を知るという自分の計画が、目の前の陽炎^{かげろう}にうつつをぬかしている間に頓挫^{とんざ}してしまいます。その人には、うつつを抜かしたつもりはないのかもしれませんが。また、精一杯人生を歩いてきたと思われるかもしれませんが、

「自分は苦しいから生まれてきた。」

「その苦しみから自分を解き放していこう。」

という自覚はなかったはずです。

さらに、殆ど^{ほとん}の人が、死ぬということは、すなわち、自分というものが消えてなくなると思っています。自分の愛する家族も、やってきた仕事も、築いた財産も、その時点でみんななくなってしまう、いえ、そのことより「死ねば自分はどうなってしまうのだろうか」

と、自分というものがなくなってしまうことに、例えようもない恐怖があるのです。

そのような人に、自分の死を本当に喜びで迎え入れることなど、できるはずがありません。だから死んでいくことは、苦しみではないのです。ましてや、病気になるって肉体的な苦痛を伴いながら、自分の死を待つ日々は、苦しみでしかないと思います。「死にたくない、死ぬのは怖い」、心の中ではそう思いながら、「どうせ自分はもうすぐ、この世からおさらばしていくのだ」と、自分に言い聞かせているだけではないでしょうか。いくら自らを励まして、一刻一刻とその時は迫ってきます。

他力信仰をやってきた人達は、神のお導きを、仏のお慈悲をと、

絶^するような、祈るような思いを出し続けます。また、常日頃は神、仏とは無縁な人であっても、なかなか心の中は大変だと思っています。大変で当たり前です。その人達は、自分自身に冷たい仕打ちをしてきたからです。自分はそんなことをした覚えはなくても、生まれてから死んでいくまでの間、苦しみから自分を何一つ救うことなく、苦しみを重ねていったに過ぎなかったなら、それは自分自身に冷たかったことになるのです。その残念無念さが、ただ心に満ち満ちている状態だと思います。

もつとも、このことは肉体を覆っている時には、自分自身ですら気付けないでしょう。自分の心の世界が大変な状態であることに、肉体生命が閉じる瞬間まで、気付けない人が殆^{ほとん}どだと思います。

⑧ 自分の亡骸 なきから

自分が死んだ後、自分の亡骸をどのようにしてほしいですか。盛大に弔とむらってほしいですか。手厚く葬ほうむってほしいですか。祭壇の前で、最後のお別れを言っいてほしいですか。そして、いつまでも自分のことを記憶に残のこしてほしいですか。

肉体細胞達の役目が終了する時、肉体細胞に「ありがとう」の思いを流しながら、その肉体から思いを離はなしていった後には、肉体という物体が残ります。私は、亡骸なきからというのは、残骸ざんがいに過ぎないと思っています。思いの抜けた残骸ざんがいです。

その残骸ざんがいの主は、ずっと肉体から抜け出して、依然として生きて
いるのです。私は、このような状態が、人間本来の姿だと感じてい
ます。つまり、私達の本当の姿は意識であり、肉体が不要になれ
ば、いつまでもその肉体に留まっていなくても感じています。

しかし、大抵の人は、その肉体にしがみついているのです。それ
は、その人がその肉体を自分だと思い込んでしまっているからです。
肉体の消滅とともに、自分というものは消滅すると思っています。
だから、手厚く葬ほうむってほしい、高僧名僧の導きで、あの世に行きた
いと本気で思っているのです。そして、命日には、在りし日の自分
を思い出してくださいと願うのです。

私は、自分の肉体細胞が活動している間に、その細胞達から優し

い温かい思いを感じさせていただいています。そして、いよいよもうその細胞達が、「さようなら」を告げる時、私達は互いに、「ありがとうございます」と思いを通じ合えると信じています。「さようなら、ありがとうございます」とお別れを告げ、ずっとその肉体から離れていくことができるだろうと感じています。私は亡骸^{なきがら}とともにあるではありません。亡骸^{なきがら}はそこにあっても、私はここに現存している、それが私自身だと感じているのです。

そのような心の状態ですので、肉体から思いを離した後は、^{あと}その亡骸^{なきがら}を処分していただくだけです。そのお手数をおかけするだけだと思っています。その処分には、何ほどのお金も要らないと考えています。

人が死んだ後々まで、別れを惜しんで、ずっと悲しみを引きずっていくのはどうでしょうか。ただ、肉体がある間、互いに互いの心を見させてくれましたという思いから、ある一定の時間は、感慨深（かんがい）いものがあると思いますが、それは寂しい悲しい思いではなくて、喜びでその人进行う、そういうことだと思ひます。その人の在りし日进行うならば、喜びで思ひてくさい。

⑨ 人間不信の時代

人間の心は汚いです。清廉潔白せいれんけつぱくを主張する人ほど、怪しいです。性根が腐っていると誰もが認めるような人物ならば、みんな様に危険を察知し、それなりの対応はしていくでしょうが、一見人徳があつて、いかにも誠実感溢れているような人には、その反対に無防備です。

あんなに高潔な人が……、あんな人格者が……、とても信じられない光景に行き当たることもままあると思います。しかし、そんな形をまといっている人間に高潔も人格者もない、私はそう思っていま

す。

何と穿^{うが}った目でしか人を見ることができないのか、人間は素晴らしいのに、そんなに何もかも否定してしまつたら、いったい何を信じていいのかと、まさに人間不信に陥^{おち}つていくかもしれません。

しかし、そういうふうな時代に突入してしまっているのです。自分^{自分}はまともだと思^{おも}つていても、さあ、どうでしょうか。心の奥底に眠^ねっている闇^{やみ}が、いつ何時^{なんとき}、どんなことをきっかけに噴^{はな}き出すか分かりません。

例えば、ニュースで、些^さ細^{さい}なことで言い争^いいになつて、どちらか一方^{いふはう}が懷^いに忍^{しの}ばせていたナイフで、片一方^{いふはう}を刺^さすとかいうことを聞^きいて、ああ、そうなのだと納得^{なつとく}したのを思い出^{おも}しています。護身用

か何か知らないけれど、そういうものを携帯している人が、案外多いということと、ほんの些^{ささい}細なことで、殺人事件にまで発展していくケースも充分にあり得ることを、改めて確認させていただきました。それは、決して他人事^{ひとごと}とは思えないような気がします。そして、決して稀^{まれ}なことでもないように思います。みんな、心に爆弾を抱えている認識が薄いだけに、危険です。悪魔の囁^{ささや}きに耳を傾けていく人が増えてくるように思います。

しかも、実際の凶器は、今では簡単に入手できます。悪魔に心を売った人達が、そのような凶器を手にして、ある日突然、街中の雑踏の中で暴れ出すケースが多発していくかもしれません。そうなれば、人々の心の中に、人間不信の思いがどんどん膨れ上がってきま

す。ふと、隣に何気なくいる人、後ろから歩いてくる人、みんなが自分を襲ってくるのではないかという疑心暗鬼^{ぎしんあんき}が、人々の心の中に広がっていきます。

そういった形で、心の闇の世界が、どんどん外に噴き出してくる時代になっていくと思います。そして、実際にそういう行動に出る人、それを見たり聞いたりして、何を信じていったらいいのかと不安と恐怖を心に膨らませている人、それぞれの心からどんどん思いが噴き出しているのに、心を見ることを知らないから、当の本人達は、それらの思いに惑わされていつてしまいます。

だから、心を見ない人間、心を見ることを知らない人間は、その肉そのものが凶器になり得ると、私は思っています。

⑩ 男と女

この世には、男と女が存在します。男と女のドラマの中で、みんな泣き笑いを繰り返しています。男は女を求め、女は男を求めます。種族繁栄のための自然が、今はその醜^{みにく}い欲望で歪^{ゆが}められています。喜びで男と女が交わり、肉体的な喜びとともに、その結合を本当に心の底から味わえるかと言えば、必ずしもそうではありません。

テクニクの問題ではなく、男も女もどちらも身勝手なのです。利害が一致し、欲望が頂点に達すれば、満足度が得られると思っ
ているようですが、決してそうではないと思います。本当に心も身体^{からだ}

も喜びの状態で、すなわち、なぜ今この肉体がここにあり、その行為がなされているのか、それを本当に心の中心でとらえていけば、その行為そのものが秘め事ではなくなっていくと思います。もつと大らかに、もつと伸び伸びと、しかも情熱的なものになっていくのではないのでしょうか。

もつとも、このことは、自分の今ある肉を通して、本当の波動の世界にある自分を知って初めて、心に感じていくことです。母なる宇宙にある自分と出会ってこそ、この世的な男と女の欲の世界が、心に響いてくるのだと思います。そのような心の状態になった時に、男と女の本当にあるべき姿というものが、どんどん心で感じられてくるのでしょうか。

今みたいに汚く歪められ、男は女を無性に求め、女は男に媚を売って、行為そのものが快楽を求める道具と化してしまつては、その欲望はどんなエスカレートしていくだけです。男は欲望を金で買い、女は身体で欲望を売って、手にする金で、また自分の欲望を満たしていくのでしょうか。そして、その欲望は、やがて自分の身体も心も蝕んでいきます。まさに自業自得です。

欲望の果てに、自らを破滅させていく様は、古今東西にある男と女の世界です。その過去世をたくさん持つて、今世、男、あるいは女の肉体を携えてきています。男と女のドロドロの世界を、みんな知り尽くしているのです。清廉潔白、聖女など、とんでもありません。

⑪ 過去世をもっと大きくとらえてください

私達は、この地球上のあらゆるところで生まれて、そして死んできました。あらゆるところで、です。地球上にたくさん転生してきて、数多くの過去世を抱えているのに、ひとつ、ふたつの過去世にこだわっているのは、おかしい話ではありませんか。また、過去世と言っても、地球上だけではありません。

冒頭でも書きましたが、私達には、地球にやってくる以前があります。そういうことを考え合わせると、過去世の名前とかにこだわるのではなくて、「なぜ私達は転生してきたのだろうか」ということ

過去世をもっと大きくとらえてください

を、もっと広い視野から、自分の中で着目していかなければならないと思います。

例えば、歴史上の誰々という過去世ではなくて、今、日本という国に生まれているという点から、過去世を語ってみましょう。

今、日本の国に生を受けているというのは、決して偶然ではなく、必然的なものです。日本は、神国日本です。古来より、天照の国として栄えてきました。天照も、ひとつの過去世です。過去、天照の意識が、何度となく地球上に肉体を持つてきました。天照は宇宙と大いに繋がっています。この場合、天照と漢字ではなく、アマテラスと表示したほうがいいかもしれません。

そして、時が流れ、アマテラスの宇宙を広げてきた意識が多く結

集してきたのが、今の時代の日本なのです。戦後は、経済大国にのし上がってきましたが、神と金に踊りまくり、やがては消え去っていく運命にあるのでしょうか。今世、母なる宇宙の波動の世界に触れたアマテラスでした。アマテラスの宇宙は小さくて、冷たいことをアマテラス自身が知ったのです。意識の世界の動きがこのようにあったから、それが形となつて出てくるのです。それがアマテラスの国、日本が辿る道、アマテラスの宇宙が崩壊する道です。

アマテラスの過去からの道のりを、自分の心の中で辿っていけば、過去世というものも大きくとらえることができると思います。もちろん、アマテラスだけに固執こしつするつもりはありません。ただ過去世を、いつの時代に、どこそこに生まれて、どんな生活をしてきたの

過去世をもっと大きくとらえてください

か、というようなところで、とらえているだけでは、所詮全体を眺めることは難しいのです。全体を眺めることが難しいということは、過去世のひとつ、ふたつ、それ以上知ったとしても、そこまです。ただ知ったというだけです。

過去世を知るということは、自分を知ることにつながってこなければなりません。なぜならば、過去世はみんな地獄に落ちてしまった状態だからです。その過去世達に、本当のことを伝えるために、それぞれの今があります。過去世は過去世、今は今、それではダメなのです。

そして、逆に言えば、今の自分を知っていけば、過去世は自ずと分かってきます。「ああ、自分達は繋がっていた」ということを感じ

てきます。学びの中においても、過去世をどんどん出して学んでいく時期がありました。それは、過去からずっと自分は続いているのだということを、知っていくためのものでした。しかし、往々にして、過去世を出す、過去世を聞く、そこに留まってしまった傾向にあつたようです。

過去世をもっと大きくとらえてください

⑫ 転生

「人はなぜ生まれてくるのか、なぜ死んでいくのか。」

難しい課題でした。しかし、永遠の今を感じる心には、それらがすべて喜びの出来事であることが分かります。生まれてくることも、死んでいくことも、みんな自分自身に目覚めていくためだったからです。自分自身に目覚めるということは、大変な作業です。生まれてくることも、死んでいくことも、苦しみだと思い続けてきたのは、その大変さを物語っていると思います。

だから、過去の修行者達は、転生輪廻てんしゅうりんねから解脱げだつすることを考えた

のです。転生とは苦しみ、その苦しみから解脱げだつすることが幸せへの道だと信じて、己の煩惱ぼんのうを滅却めつきやくすることに勤いそしんでいたと思います。それは、とんでもない思い違いであり、全くの無知でしかありません。

しかし、そのことは意識の転回を始めなければ、分らないことです。いくら厳しい修行を重ねても、意識の転回が自分の中で始まらない限り、永遠に地獄なのです。ましてや、日々の生活に四苦八苦している中では、自分達の生活を守ること、手一杯です。その中で何とか幸せに、豊かに、実りある時間をと、それぞれ懸命に生きていくようですが、それがやがて音をなして崩れていく時が、やってくると言っているのです。

過去の時代においても、そうだったはずです。いつの時代においても、天変地異は付きものです。しかし、意識の転回をやってこなかった私達は、いつも呪いと恨みの中で、死んでいったのです。そして、その意識の世界は、もちろんそのままで、また生まれ続けるのだから、生も死も苦しみ、いつの間にかそれが定着してしまいました。

その中で、守ろうとします。死守します。肉にしがみつきたい、その執着はすごいものです。全部、周りに責任を転嫁していきます。事実、過去において、そうしてきました。誰を恨んでも、何を呪っても、結局は自分自身が真つ暗な奥底に沈んでいただけでした。そして、その真つ暗な奥底から、何度も何度も這い上がっていこう

とするけれど、恨みの心や呪いの心で、また自らを沈めてきたのです。

優雅で華やかな時代に生まれてきても、意識の世界は真つ暗でした。一国を治める権力者であっても、路傍ろぼうにひっそりと暮らす一介の民であっても、意識の世界はみんな真つ暗、そして真つ暗同士が近い関係を持って、互いの真つ暗を見せ合うのが転生の数々でした。おびただしいほどの人間ドラマを心に持ち、それでもまた生まれてくるのです。何度も何度も、自分を目覚めさせるチャンスをもらってくるのです。

世の中には、転生を信じている人も多くおられることでしょう。しかし、その人達もまた、それぞれの転生が、実は連結したもので

あることに、まだ気付いていないと思います。意識の転回をしない
で、存在しているからです。

⑬ 自分を繋ぐとは、どういうことでしょうか

自分を繋ぐとは、どういうことなのか分かりますか。

例えば、私は自分の来世に思いを向けると、「今世の肉を置いて、来世の肉を身にまとい、私達はともに生きていきます。肉の状態が変わっているだけで、私達には変わりはありません」という思いを感じます。

この私の中で語っている私の存在を、今の私自身、感知することができます。これは、私の過去世もそうです。その感覚が、私の中にはあるのです。だから、私は過去から未来へと続いていく存在だ

自分を繋ぐとは、どういうことでしょうか

と、自分自身をそう確信しています。

もう少し、私自身の思いを聞いてみましょう。

「自分を繋いできたのです。真つ暗な中を繋いできた、私にはそのことを感じるができます。そして、私自身は今世の時間を迎えました。並々ならぬ決意を秘め、生まれてきました。そして、さらに最終の肉へと繋いでいく途上にあります。今は二五〇年後、二五〇年後は今、この感覚の私は、嬉しくてありがたいです。肉をもろうことがただ嬉しい、生まれてくることも死んでいくことも、自分自身に目覚めるためのものだった、この気付きは本当に大きな変化でした。」

苦しみの中で、息も絶え絶えの中で、自分自身がようやく辿り着いたもの、それは、「何もなくても幸せでした。私は喜びでした」という世界だったのです。「自分自身が喜び」、そう私自身が、みんな伝えてくれました。

私達は、誰一人例外なく、自分を繋いできました。本当の自分と出会いたい思いが、自分を繋いでいくのです。エネルギーとして、もともと存在している私達は、その本当の自分と出会いたい思いを実現したくて、人間という形となって現れてきます。その都度の形は違っても、中身は同じなのです。すなわち、エネルギーが肉体を持って、本当の自分と出会いたい思いを繋いでいくのです。今世、

自分を繋ぐとは、どういうことでしょうか

私は、そのことをはっきりと心で知りました。

⑭ 来世が語ってくることを信じますか

過去世があるならば、来世もあります。例えば、私は、来世の私の思いを次のように感じています。

「私はあなたの来世、二五〇年後に肉をもらって生まれてくる私です。まだ私は、形となって生まれてきてはいませんが、事実このようにしてあなたの中から語っています。

これからは、よりいっそう私の存在を、あなたの心の中で加味しながら、ともに進んでいってください。

さて、私があなたに語っていくことは、今の肉のあなたには少し先のような感覚でしょうが、私からすれば、私とあなたはすでに一体となって、意識の世界を進んでいます。私達は今世と来世を橋渡しにして繋がっており、あなたの今世から引き継いだものを、私は来世、さらに先へと進めていきます。

今世のあなたは、肉を持って、心の中にある真つ黒なエネルギーが、みんな喜びのエネルギーであることを知りました。真つ黒だから肉をもらってきたことを、心の底から知りました。私達の計画は、今、順調に進んでいます。これが私達の宇宙を変えていくことを、まだあなた自身、認識不足のところがるように思います。

あなたが、今、生まれて生活の本拠としている日本という国も、

これからさらに大変な時代に突入していきます。もちろん、その兆しは、すでに様々な分野から出てきていますし、自然現象にもそれが現れてきています。そのひとつひとつを区別して、そのひとつひとつの中で論じ合うのではなく、それぞれには、ひとつの連鎖があるのです。ご存じの通り、それが意識の流れです。その流れの中で、私はあなたから、この心を繋いでいただきました。

私の心の中には、喜びのエネルギーがいっぱい詰まっています。息苦しいほど、そして、もう今か今かと待ち構えているのが来世の私です。肉の殻を突き破った中で、私はあなたとこのように語り合える日を待っていました。

私が語ることは、近未来を予言するといったものではありません。

来世が語ってくることを信じますか

予言という言葉の響きは、あまりよくありません。予言という言葉を使いたくはないのですが、あなたがこれからその肉を終え、また再び肉を持つまでの間の、あなた自身の勉強ということを前提にして、自分の心で感じていくことを、ただ形に表していくのだと思ってください。

さて、あなたは、ご自身の今世の軌跡きせきを、すでに自分なりにまとめられています。『自分自身なぜ肉を持ったのか』に対する回答と、そして、その肉の環境を通じて、本当に自分自身が望んできたことを、心に広げていく過程にある今という時のありがたさを、しっかりと感じられたと思います。その方向は間違っていないです。これからも自分の心を見えるということだけに専心していただく。

あなた自身の近未来に心に向けて、思いを向けて、そこから感じられるあなた自身の波動を、さらにまたご自分の心で受け止めてください。」

このメッセージは、決して作文したものではありません。私の頭を通過させたものでもないのです。しかし、淡々と語ってきます。私もまた、その思いを淡々と受けていつています。今世の私と来世の私は、まとう肉が違うだけで、同一であることを感じているから、来世の私が語ってくることに對して、私の中では、特別不思議なことではありません。

来世が語ってくることを信じますか

⑮ 宗教の世界は、まもなく崩れ去っていきます

宗教とは、戦いのエネルギーです。人を容赦なく殺していきます。背後にあるものは恐怖心です。人を救い、恵みをもたらすものではありません。

そもそも、宗教というものが、この世にあることが異常なのです。人の拠り所^よとしてあることが異常なのです。「なぜ神や仏に救いを求めていくのか」、「なぜ宇宙のパワーを欲するのか」、何の疑問も持たずに、闇雲^{やみくも}に信じていくことが、おかしいではありませんか。そして、おかしいと思えないほど狂った意識の世界のままに、今日^{こんにち}

あることが、次から次へと露呈ろていされていきます。

宗教界の裏側、汚い部分が明るみになっていきますが、それでもそこに一度はまり込んでしまえば、背後にある恐怖心から、自分を解き放すことはできないのです。そのような人達は、愚かです。そして、哀れです。

自分が何者かを知らないから、神を求め、神の化身を信じていくのです。世の中狂って当然です。何が何だか分からない、信じるものがないと、疑心暗鬼ぎしんあんきに陥っていきます。宗教を求めるエネルギーがそのように形となって出てきます。宗教に救いを助けを求めていることが、どういうことなのか、そのエネルギーとはどのようなエネルギーなのか、自らの肉体を通して知っていく時が、必ずやって

宗教の世界は、まもなく崩れ去っていきます

きます。

それは生き地獄です。形の世界に生きていると思っている意識にとつて、これほどの地獄はないと言えるほどの地獄の様相を、目の^まあたりにしていくのだと思います。それでもなかなか、神を自分の外に作った思ひは、変えることが難しいかもしれません。救ってくださいと祈って祭ってきた、自分の中のおびただしいほどの過去世達が存在しているからです。ずっとその過去世達の思ひのまま、動いてきたのです。

肉体をもらって、その間違いを知って、それを過去世達に伝える計画でしたが、今世もまた、その計画の前に大きく立ちほだかつている宗教という名の壁がありました。神、仏、宇宙のパワーを好き

な過去世達の思いを変えていくことは難しかったのです。そうです、確かに今までは、そうでした。宗教を隠れ蓑みのにして、お金も権力も何もかも吸い寄せられてきたのです。

しかし、これからはそうはいきません。色々なものが明るみに出てきて、まず、宗教色の濃い場所に、次から次へと異変が起こってきます。神、仏に守られている神聖なる場所は、実はそうでないことが分かってくるのです。そこに集う真つ黒なエネルギーが、仕事をしてまいります。おそらく、人々は恐れおののくことでしょう。そして、ますます神に、仏に、宇宙のパワーに、祈りの思いを向けていくかもしれません。

しかし、さらに追い討ちをかけるようにして、どんなに祈り祭っ

でも、人類は救われないことを告げる現象が起こってきます。そして、神も仏も宇宙のパワーさえも、何の役にも立たない現象を目の当たりにして、ようやく、自分達が祈り続けてきた、崇め奉ってきた世界の現実を知っていくのだと思います。

宗教の世界が跡形もなく消え去っていくまで、そのような現象は、この地球上に繰り返してきます。私達は、そのお手伝いができることを嬉しく思っています。

⑯結婚、出産、子育てを通して、何を学ばれましたか

女という肉体を持ってくれば、結婚、出産、子育てがひとつの過程です。ではいったい、どれだけの女性が、妻として母親として、その過程を喜びで歩み続けているでしょうか。

本来は、その過程は、一人の女性として、一人の人間としての喜びの過程です。子供を儲けて、その子供を育てていく中で、自分もまた一人の人間として、いえ、もつと言えば、自分の意識の世界が成長していくことを予定してきたはずです。

出産は大きな仕事です。我が子を産むというよりも、意識をこの

世に送り出してあげられる機会なのです。そして、形を持ってきた意識とともに、子育ての時間を与えられた母親（意識）は、これ以上の学べるチャンスはないと思います。子育てとは、そういうものではないでしょうか。子育てを通して、自分自身を成長させていけるから、出産、子育ては、喜びになってくるのではないのでしょうか。しかし、現実には家の風習、周りの慣習、様々なところで、本来の子育ては歪められています。もちろん、母親本人も、まだ出産、子育ての本当の意味を知らないから、自分の我がままに、子供を育てていくのだと思います。我が子という慈しみで、子供を見るのではなく、我が親の思いで子供と接していくのだと思います。

子供は親の従属物ではありません。私が産んだ子供、その思いの

エネルギーを、自分で感じていけば分かりますが、それはさまざまなものです。もし、あなたが子育ての途上か、あるいは、卒業されているとするならば、結婚、出産、子育てを通して、私はどのように成長させていただきましたと、どれだけ本音で語ることができるのでしょうか。子供を躰しづけて立派に成長させ、世に送り出すことが、親の仕事ではありません。親もまた、その子供とともに成長していかなければなりません。親が上で子供が下、決してそうではないと思います。

もちろん、肉の親子関係からすれば、そうかもしれませんが、意識の世界から見れば、それぞれが尊い存在なのです。「全く無知な私が、子供を持つことによって、自分というものをほんの少しでも

結婚、出産、子育てを通して、何を学ばれましたか

知る機会を得られたことが嬉しいのです」。このような母親こそが、肝っ玉母さんと呼べるのではないでしょうか。子供をたくさん産み、大らかに育てていくお母さんは、確かに肝っ玉母さんかもしれません。んが、その意識の世界を感じていけば、案外種族の長たる意識に牛耳ぎゅうじられているかもしれません。懐ふところが深いようで、牛耳ぎゅうじるエネルギーが大きい、結局は苦しいエネルギーと繋がっているのだと思います。

それよりも、我が子をお腹なかに宿した時の母の喜びのまま、ともに母と子の関係が続いていけば、言うことはありません。ひとつ、ひとつが、自分の間違いに気付いていくために存在している意識だと、本当に感じることできたなら、そのお母さんこそが、母の鏡だと

思います。しかし、このことは、大変難しいことだと思います。

結婚、出産、子育てを通して、何を学ばれましたか

⑪ 殺人の背景にあるものは

今の時代は、簡単に人を殺します。殺人事件が起こらない日はないでしょう。計画殺人、行きずり殺人、道連れ殺人、その形態は色々あるし、また子殺し、親殺しなど、身内の中でも起こります。精神鑑定を待たなければならぬ異常な事件も、数多く発生しています。

獄中で手記を綴ったり、毎日、反省文を日記のように書いて、自分の犯した罪の深さを悔いている受刑者もあると思います。受刑者は、自分の心の内側を見つめながらの時間を、獄中にある間、与え

られているに違いありませんが、自分の生まれ育った生い立ちから、家庭環境、それらを仮に全部振り返ったとしても、どうして自分はこんな罪を犯してしまったのか、事件を起こした背景の本当のところには、辿り着くことは難しいと思います。

そして、依頼殺人は別として、実際に手を下せば、その殺人の瞬間の感触は消えずに残っているはずです。その重い荷物を背負って、自分に残された時間を生きていかなければならないのです。どんなに罪を懺悔^{ざんげ}しても、苦しいと思います。

人を殺してしまうほどのエネルギーは、誰しもが抱えています。それを実際に行動に移すのと、そうでないのとの違いであって、殺人を犯す背景は、みんなその心に持っていると思います。

現実に罪を犯した人が、もし本当の母の心、母の温もりに触れることができたなら、自分の蓄えてきたエネルギーが、このような形になって噴き出してきたことを感じていくと思います。そして、そのような自分の心の奥深くに思いが届いて初めて、自分に対して懺悔^{ざんげ}の思いが出てくるのです。被害に遭遇した相手と、その遺族に對しては、もちろん言うまでもありませんが、罪を犯した自分を悔い責めるのではなく、自分に心から詫^わびていく思いが、心の底から沸き上がってくることでしょう。殺人の背景にあるものは、生まれてから今日までの年月に培われたものではないことを、自らが知っていくと思います。

そのようにして、今世の時間をすべて捧げても、自分自身の間違

いに、本当に心から気が付いたなら、その犯罪者は、そのような形で、自分を繋いでいけるのだと思います。次の転生、そのまた次の転生、同じことを繰り返すかもしれませんが、それでもそうやって、自分の中の本当の優しさや温もりに触れていくことができた時に、初めて自分を許すことを知るのだと思います。

⑱ 憎いのはガン細胞ですか

私達は、肉體細胞に支えられています。その細胞に異変が起きて、それが肉體の存続を危うくしていく、言うなれば、私達にとって一番怖い病気が、ガンだと思います。

細胞が死滅し、損傷していくほどのエネルギーを流してきた、一言で言えばそうなのです。しかし、それはガン患者に限ったことではありません。ガンという病を得て、その人達はそこで、何かに氣付いていくだけなのです。当の本人もそうですし、周りの家族もそのチャンスなのです。

しかし、大抵は、そのように受け取ることができません。死の恐怖と経済的な問題が、まずどなたの心にも浮かび上がってきます。

憎きものは、ガン細胞なのです。これがみんなを狂わせてしまった、だからこれさえなくなればと、医者も患者も、ガン細胞を潰^{つぶ}しにかかります。

ガンと闘うとか、ガン撲滅とか、それぞれの心から流れ出すエネルギーは、すさまじいものです。そのことに気が付いていけばということですが、ガンと闘う心には、自分のエネルギーを、ずっと受け続けてくれた我が細胞に対して、優しさの一欠けらもありません。

もちろん、腐って機能しなくなった部位を切り取れば、また元気を取り戻すことができるでしょう。医学の技術は格段に進歩し、薬

もそうだと思います。部位は切り取ればそれで済むかもしれませんが、心のガンはなかなかやっかいなものです。

ガンと闘う心には、ガン細胞からの伝言は届きません。傷んで切り捨てられる細胞から流れ出す優しさに、出会えません。

私を救ってくださいと懇願する前に、切り捨てられる細胞に心に向けていく人がいてもおかしくはありません。生命の灯火の消える間際でもいい、自分の心に伝わってくる優しさと温もりを、全部シャットアウトしてきた心の貧しさに、何とも言えない思いを感じていける人は、その瞬間、自分を救ったのだと思います。

そうなった時に、その人は、いたずらに長く生きることだけが人の幸せではないことを、心のどこかで感じるのではないのでしょうか。

ガン細胞が教えてくれたものはこのことだったのか、ガン細胞から、その人も、そして周りの人達も、優しさの波動を感じていくことができたなら、幸せだと思います。

憎いのはガン細胞ですか

①9 絆きずな

夫婦の絆きずな、あるいは家族の絆きずなは、何によって結びついているのでしょうか。絆きずなとは、絶つことができない人と人の結びつきを言いますが、それも今では、あまりにも簡単に容易たやすく切れてしまうのではないのでしょうか。そうは思いたくはありませんが、案外もういかもしれません。

夫婦バラバラ、家族バラバラ、そのような人達が、一つ屋根の下で生活をしている、互いが互いを干渉せずに、勝手気ままに自分達の生活空間を楽しんでいる、そういう夫婦や親子の形態が今風なの

かもしれません。

そのような夫婦、家族の中に、例えば、ポーンと小石を投げ込んだとしてみましよう。投げ込まれた小石の波紋は、そこにいる人達の心を刺激していきます。普段はバラバラでも、それを境に足並みを揃えようとする場合もあるし、余計に距離が開き、バラバラの状態がさらに進んでいく場合もあります。

小石が投げ入れられて、なぜこの夫なのか、妻なのか、なぜこの家族なのか、と改めて考える時があると思います。答えなど出なくていいのかもしれませんが。出せなくていいのかもしれませんが。考える、思うだけでいいのかもしれませんが。この夫があつての私、この妻があつての自分、私にはこんないい家族がいるではないか、小

石が投げ入れられて、そう思えるならば、「小石さん、ありがとう」となりませんか。「その小石とは何か」、「小石を投げ入れられて起る波紋とは何だろうか」、夫から、妻から、家族から、その繋がりを通して、自分の人生を考え、今があることに幸せや喜びを感じていくことができたなら、その人は、一歩前進だと思っています。

そのようにして、人は何かに気付いていくようになっていきます。だから、今回、小石で気付けないなら、次はもう少し大きな石になり、その次はと続いていくと思います。

そして、やがて、そのような中で、この夫がいてくれたから、この妻が、この家族がいてくれたから、という思いが、いつの間にか薄くなって、もっと深い絆きずなを感じていくかもしれません。

「夫、妻、家族というものではない、自分とのもっと深い、絶つことができない結びつきがあるのではないか。」

そう感じ始めてくるかもしれません。

②⑩ お金のパワー

お金のパワーを考えてみましょう。そのパワーに吸い寄せられるように、お金は人を変えていきます。その人の人生を狂わせていきます。お金をたくさん手にすれば、大抵の人は、お金に対する感覚が麻痺していきます。

そもそも、お金とは何でしょうか。生活していくためには、お金は必要です。お金と交換に物を購入し、サービスを受けています。庶民にとっては、マイホーム購入資金、教育資金、老後資金が大きな三本柱です。自分の幸せ、家族の幸せ、ささやかな幸せのために、

せつせと働いている人が多い中、ギャンブルやマネーゲームで身を滅ぼす人も、また、たくさんいます。勞せずして儲けよう、そんな甘い話はないと分かっているはずなのに、なぜか人は、そこにはまっついていきます。しかも退職金や老後の蓄えをつぎ込んでしまうのは、お金のパワーに惑わされた典型なのでしょう。

ここでもまた、人は大きな過ちを犯しています。それは、お金にパワーがあると思っていることです。豊富な財力があれば、豊かな暮らしは保証されているかのようにですが、豊かな暮らしは本当に幸せの証あかしなのでしょうか。お金持ちはみんな幸せなのでしょうか。お金を手にすることで、失うものはないのでしょうか。お金が、財産があるがゆえに、不幸せな人もいるのではないのでしょうか。

第一、お金に、真のパワーがあるならば、お金を巡って、争いは起きません。お金にパワーがあるとすれば、自分の中の欲深さを、物の見事に抉^{えぐ}ってくれるということでしょうか。お金はお金にしか過ぎませんが、人間の欲の思いを一番分かりやすく見させてくれるものです。自分の思いがお金を使ってどのように現れていくのか、自分を自分で狂わせていく様^{さま}を存分に見させてくれると思います。

㊦ 一度きりの人生

「泣いて暮らしても一生、笑って暮らしても一生、同じ一生なら楽しく明るく豊かに暮らしていきましょう」、それも一理はあると思います。しかし、表面だけを取り繕って、楽しく明るく豊かに暮らしても、それはいずれ剥^はげてきます。楽しく明るく豊かに暮らす中の問題です。いったい何があれば、楽しく明るく豊かに暮らしていくことができるのでしょうか。

一度きりの人生だから、楽しまなくては損ですか。一度きりの人生だから、一生懸命生きていこうとしているのですか。それとも、

一度きりの人生だから、刹那的せつなてきに生きていきますか。とりあえず、まあ頑張ってみようか、とりあえず今はこうしておこう、そうして、とりあえず毎日が過ぎ去っていつていくのかもしれない。

自分を繋いできたことを確認できた私は、人生というのは、プツンプツンと途切れているのではなくて、連続しているものだと思います。それが私の出発点です。この出発点に立つて、今の人生の時間を見てみれば、過去から未来へと続いていく私の時間の中の、一部分にしか過ぎないことが感じられます。

全体を視野に入れながら、ある一部分をとらえる場合と、その部分しかとらえていない場合とでは、当然その一部分に対する思いが違ってきます。前者は、なるほど今世の時間は、全体から見れば一

部分に過ぎないけれども、その一部分が、すなわち全体であつて、一部分の変化は全体に影響を及ぼしていくことを感じます。後者は、まさに人生一度きりの基準に立った見方です。部分だけをつかまえて、奮闘していくか、ただ流されていく人生だと思います。

永遠に続いていく自分の時間というふうに思うと、今という時の過ごし方もまた違つてくると思います。一度、過去からの自分を思い、未来の自分に思いを馳^はせてみませんか。そして、今の自分を思つてみてください。確かに、今ある生活は大切でしょう。自分や自分の周りにいる人達は大切な人かもしれません。

しかし、もつと何か、もつと広い自分の世界があることを感じられないでしょうか。

「自分をもっと待っていてくれるものがあるのではないか。」

「自分をもっと必要として待っていてくれるものがあるのではないか。」

そういうものを感じませんか。

もつとも、一度きりの人生だと思っている人には、それは難しいことかもしれません。その人の思いの世界は、そこでストップするからです。その人は今、自分が、行き止まりの狭い世界にいることを知りません。

考えてもみてください。どんなに華やかで時間であっても、その時間というものは、八十年そこそこでしょう。しかし、私は、永遠の時間を感じているのです。そういうことを感じている人と、感じ

ていない人との差は大きいものがあります。そして、一度きりの人生だと思って、本当に自分を大切にして生きているのかと言えば、決してそうではありません。自分に無責任だから、一度きりの人生だと思うのです。一度きりの人生だと思っている人に、自分を大切にすることはできないと、私は思っています。あなたが自身、どのような思われますでしょうか。

② 仕事人間は、気付けば仕事中毒になっています

女性には、子供を産むという大きな仕事を与えられます。もちろん、今は、出産を終えても社会復帰の道は開かれていますし、子育てについても、様々な方面から支援があります。そういう面から、女性の社会進出は目覚ましいものがあると思います。

確かに、女性にとって、結婚して出産するのが当たり前と思われてきた時代よりも、今はたくさん選択肢がありますが、今の世の中、仕事に男女の区別はないと言われながら、やはり日本の国における職場は、まだまだ男社会のようです。

そういうことを踏まえつつ、男の側^{がわ}から会社あるいは組織、仕事といった部分に思いを向ければ、会社人間の悲哀というか、そのようなものを感じます。

男にとって、会社、職場は、家族の生活を支えるために、仕事をして収入を得ていく場であると同時に、己を顕示していく場でもあります。仕事ができる男は、当然収入も高いでしょう。それがそのまま、人物評価と比例していくかどうかは別として、形は部下を引き連れた長になります。それがその人の光の部分であるとしたならば、影の部分もちろんあると思います。

重責のある仕事を任された人は、それをこなしていくために、何かを犠牲にしている場合が多いと思います。一番多いのは、家庭を

仕事人間は、気付けば仕事中毒になっています

顧みないことです。そのような人達は、仕事、仕事に追われて、いつの間にか、自分の安らぎの場である家庭を失ってまでも、そして、自分の健康を損ねてまでも、仕事に没頭してきた自分を振り返る時、「その仕事とはいったい何のためにやってきたのか、家族のためではなかったのか。」

と、愕然とするかもしれません。

「私は、家族のために一生懸命働いてきたのに、その自分から離反していく家族とは、自分にとって何だったのか。」

「組織の中に組み込まれて、縦社会の中で、嫌なものも嫌とは言わずに会社に尽くしてきたのに、首の挿げ替えはこんな簡単に行われるのか。」

そのようなことを思わざるを得ない場面に、遭遇することがあるかもしれません。

では、家族のため、会社のためと言っていますが、本当にそうなのでしょうか。最初はその思いは確かにあったのかもしれませんが、やがてその思いは、仕事に没頭していくことで、何かから逃げる手段に摩^すり替^かわっていったとは思いませんか。つまり、仕事に逃げ込んでいった自分自身があるのではないのでしょうか。そうであるならば、何から逃げ出したかったのか、分かりますか。

確かに、目の前に山積みされた仕事をこなしていくことで、自分の存在価値を内外にアピールできます。その人は、その部署において、いえ、会社において、なくてはならない存在になっていくかも

しれません。会社に貢献した人物として、それ相当の評価も、もちろんあるでしょう。

しかし、今、仕事というものから切り離して、その人物を見た時に、その人もまた一人の家庭人であるし、一人の人間には違いありません。実は、仕事に追われて、時間に追われて、人生の時間の大半を会社、仕事に費やしてきた人ほど、一人の家庭人、一人の人間に戻ることが、不安なのです。不安だからこそ、さらに仕事にエネルギーを注いでいくのです。

「仕事を自分から切り離れた時に、いったい自分に何が残るのだろうか。」

「仕事がなくなれば、自分の生きている意味が見えない不安があ

る。」

などということは考えたくないのでしょう。考えたくないから、定年退職後も働き続けます。もちろん、そうするには、経済的な理由、自分の健康を考えてという理由もあるかもしれませんが、自分の存在意義を探しているのだと思います。会社に尽くしてきた思いが、今度は社会に貢献していこう、自分のできることで社会に還元していきたい、そのような理由付けがあるかもしれません。考え方は立派だと思います。

しかし、それでは、その人は、「いったい、いつ自分と向き合うのだろうか」と私は言いたいのです。会社と運命をともにしてきた時間の万分の一でも、自分と運命をともにして生きていくために、費

やしてほしいと思います。

さて、先ほどの、何から逃げたかったのかという質問ですが、結局、自分から逃げたかったのではないのでしょうか。自分を見たくない、自分を知りたくない、その思いが仕事に没頭させていくのではないのでしょうか。

「仕事が生きがい、仕事が命」、その人たちの仕事に賭ける意気込み、情熱はもてはやされるかもしれませんが、私にはそう思えないのです。もてはやどころか、それは完全に末期症状だと思います。仕事中毒にかかっているという自覚症状もないまま、末期症状を迎えられている哀れさを感じます。

自分に自分が与えた時間です。若い時は、何らかの職に就いて、

生活の基盤を整えなければなりません。しかし、いつまでも、そのようなものにしがみついているのは、本当にもつたいない人生だと思っています。「自分の本来の仕事をほったらかしにしておいて、何が仕事か命だ」と、私は思います。

㊤ 介護

高齢化時代を迎えて、介護の問題が急浮上しています。親の介護を子供がする時代から、介護の手を他人に任せてしまう時代へ変わってきました。補助的に介護制度を利用する人や、現代版姥捨^{うばす}て山のような感覚でいる人など様々です。

確かに、専門的知識を持つ介護士や、介護の専門的な施設や用具の充実で、快適で安心な老後を過ごしていけるような環境が整いつつあります。そういう点からすれば、介護を必要とする人、その家族にとっては、法整備をより充実していただいて、互いに広く活用

すれば、大いに助かると思います。しかし、物的環境がどんなに整備されても、介護を取り巻く環境は、決して明るいものではないと思います。

介護する人、される人、それぞれが本当のことを知って、介護をし、そして受ける、このような状態であれば、どんなに不自由な身体であつても、認知症の状態がどれだけ進んでいても、互いの心から流れ出すものは、喜びです。お世話をするほう、されるほう、そのことを通して、互いに自分の間違いに喜んで気付いていくことができます。「ありがとう、ありがとう」と互いに交わす言葉と笑みの中に、今生かされている喜びを、しっかりと感じ合っていけるとだと思います。

しかし、現実の介護の世界は、そのような世界とは、全く遠くにか
け離れています。互いに互いを肉としてしか見ていないからです。
肉のお世話をしてもらうほうは、してもらうことを当然のように思
い、またお世話をするほうもまた、様々な思いを流しながらしてい
るはずです。言葉や態度は優しくても、心の中は、「我に従え」の
思いをどんどん流している場合も、多々あると思います。

また、たとえ、どんなに手厚い介護の中でも、それには限界があ
ることを知ってください。食事の世話や、排便や、その他の介添え
はできても、心の苦しさまではどうすることもできません。話し相
手になり、歌を歌い、和やかな雰囲気を作ってみても、心の中を吹
き荒れる寂しさを癒すお手伝いには、殆ど^{ほとんど}なりません。

そして、介護の世界は、もちろんビジネスですから、お金が動きます。お金にまつわる暗い影が、よりいつそう介護の世界を暗くしていきます。ゆくゆくは、超高齢者社会を迎えていく日本を象徴しているのが、介護の世界だと思います。

終わりに

以上、主^{おも}にふと思いついた項目について、思いを語らせていただきました。如何^{いか}でしたでしょうか。

あなた自身も、またそれらの題材について、思いや感じているところをまとめてみませんか。そして、自分自身の思いや、感じていることを綴る中で、ひとつ注目していただきたいことがあります。あなた自身の基準です。なぜ自分はそのように思うのか、あなた自身に、何かそう思い、感じていく基準となるものがあるはずです。何を思い、どう感じていくかよりも、なぜそう思うのかということ

に、もっとスポットを当てていただけたらと思います。

ところで、人にはそれぞれ、豊富な知識と、自らの体験をベースにした思いや考えがあると思います。一人の人間としての生き様も様々にあると思います。しかし、そのこととは別に、確実に私達の周りに変化が起こってきていることを、私はお伝えしたいのです。今はまだそのことに気付いていない人も、やがて、自分の目を通して、耳を通して、感じていかれることと思います。

一言で言えば、それは天変地異の足音です。どんなに自分達を守ろうとしても、根こそぎ崩れ去っていくことを、体験されていくことでしょう。私は、その足音、気配をもう間近に感じています。

そこで、最後に、本書の本編の予告になるかもしれませんが、U

F O、地球、そして宇宙への軌跡^{きせき}、という項目で、少し私自身の思いを語らせていただいて、本書をひとまず閉じさせていただきます。

② UFO

UFO達の思いが心に響いてきます。私の仲間達でもあり、そして、私の過去世でもあります。

これから、たくさんのUFOが飛来してくることを感じます。UFOは目に見える物質ではありません。しかし、いつも私達とともにあることを感じます。もちろん、プラスもマイナスも様々な波動をUFOは発信してきます。受信機が精巧なものでなければなりません。そうでなければ、マイナスもプラスと受信してしまうから、そのエネルギーに巻き込まれていくのです。

しかし、本来はマイナスもプラスなのです。発信元はマイナスであつても受信先で、プラスに変えていくことができます。私はそのことを知りました。

宇宙は喜びのエネルギーです。宇宙にさまよい続けているUFO達の思いを、受け止めていけるのは、母の優しさと温もりです。そして、その優しさと温もりにより、マイナスのエネルギーはプラスに作用していきます。そして、全体のエネルギーは増していきます。宇宙から発信されるエネルギーは増大され、私達が生存している地球は大きく包まれていくのです。プラスのエネルギーに大きく包まれていく地球は、どうなるのでしょうか。

地球はもともプラスでした。マイナスのエネルギーが蔓延^{まんえん}して

いる中で、本来の姿に戻っていかうとします。宇宙からのプラスのエネルギーに促されていきます。本来の姿に戻っていかうとする地球は、その内部からどんどんどんエネルギーを噴き出していきます。喜びでエネルギーを噴き上げてくるのです。

②5 地球

人類の宇宙への関心は高く、向ける思いも熱いものがあります。シャトルを飛ばし、地球を外から眺める人類の心は、未知なる宇宙の世界へ、さらに向いていきます。

ひとつの惑星ととらえる地球は、緑なす地球として美しいでしょう。

その地球から、今、私達に伝えてくれている思いがあるとするならば、どのようなメッセージだと思えますか。

私には、地球はもう限界ぎりぎりの状態のように感じられます。

人類のすさまじいエネルギーをまともに受けている地球です。今どれだけの人が、そのことを切実に感じておられるでしょうか。地球環境を汚染しているのは、有害物質ではありません。その有害物質を排出している人類の意識の世界なのです。その世界から流れ出すものは、目には見えないのです。しかし、感じる人には、どんどん感じられると思います。

例えば、それは真っ黒なヘドロのようなものです。私達が、今生存している地球は、そのヘドロのようなものに覆い尽くされている状態です。その地球の悲鳴にも似たような思いが伝わってきます。確実に病んでいく地球です。

しかし、その意識は、地球上における人類のすさまじいエネルギー

ギーに対して、報復する手段はとらないのです。人類自ら気付いて
いけるような温かい優しい思いを流し続けているのです。まさに、
それは母の心ではないでしょうか。みんな受け入れて包んでくれて、
そして、気付きを促してくれています。

②⑥ 宇宙への軌跡^{きせき}

私は、今世、日本人としての肉を持ったことによって、自分自身の軌跡^{きせき}を心で感^きじることができました。

それは、真^まつ黒^{くろ}な宇宙^{うちゅう}から、喜^{よろこ}びへの宇宙^{うちゅう}への道のり、これが私の軌跡^{きせき}でした。地球上での転生^{てんせい}より以前の転生^{てんせい}があることを書きましたが、今世以前は、その真^まつ黒^{くろ}な宇宙^{うちゅう}を心に引^ひきずつたままでした。人間として、この地球上に生存^{せいぞん}可能な機能^{きこう}を携^もえて、何度^{いくばく}も転生の機会^{きかい}を得てきましたが、私の中はずつと変わらずに、真^まつ黒^{くろ}な宇宙^{うちゅう}でした。

それが、今世、一人の人間と出会い、私は自分の中の宇宙を、ようやく喜びの宇宙へと、変えていける道筋にあることを知りました。これから、私はさらに、喜びの宇宙への軌跡きせきを描いてまいります。それが、これからの地球上に起こる様々な出来事と、深い繋がりがあることを伝えます。

宇宙へ発信する喜びのエネルギーは、大きなエネルギーです。地球の地軸を動かすことも可能です。地軸が動くとは、どういうことでしょうか。世界地図は大きく変わります。動植物の生態系もまた大きく変わっていくでしょう。

そのような中でも、真実から遠くにある意識は、肉を持たなければならぬでしょう。真実に目覚めていく流れの中に、すべての

意識があるからです。

追伸

母なる宇宙への思い

私達は、あなたの許に帰るために、この地球上においても、数え切れないほどの転生を繰り返してまいりました。地球以前の時間を加えると、果てしない過去からずっとあなたを探して、宇宙をさまよい続けてきた意識です。

あなたを心から捨て去った私達は、真つ暗な宇宙を自分の中に広げてきました。どんなに幸せと喜びを求めてきたことか、それがここごとく失敗に終わってきたのです。私達はあなたを恨みました。

呪いました。なぜ私達を見捨てたのか、なぜ私達をこんなに真つ暗な地獄の中に突き落としていったのか、心の奥底であなたに帰りたいと叫びながら、その叫びを自ら押し留めてきた私達がありました。長かったです。長くて苦しくて、いまだにたくさんの私達の仲間には、本当のことを知らずに、苦しみの淵に沈んだままの状態です。

そのような状態の私達に、今世という時間が与えられました。私達は、決して選ばれた特別な存在ではありませんが、今世という時間の中で、真実の波動の世界に触れていきたいと心に強く願って、それぞれが、それぞれの肉を選び、環境を選び、そして、学びに集うことを誓ってきた意識です。さらに言うならば、本当にどうしようもないほどに地に落ちてしまった私達だから、今世の時間を自ら

に与えたということです。

今世、学びに集ってきた私の仲間達には、まだその自覚がない人もかなりありますが、間違はなく私達は、自分との固い約束がありました。母から肉体をもらって、この世に出てくるということは、すべての意識にとってのチャンスであることに違いはありません。

しかし、実際に学びに集える、真実の波動の世界に触れるチャンスがあるというのは、本当にその中で一握りの意識なのです。だから、特別だという思いを広げられてこられた人もありますが、私は、そのことをただただ喜んでいました。「ありがとう」の本の中に記したように、私は自分の道を、ただひたすらに歩み続ける喜びを知ったのです。心を見て、本当にそうでしたと何度も自分の中で、

頷いてきたのです。

今、目を閉じて母を思い、宇宙を思えば、確実に響いてくる波動の世界があります。いえ、目を閉じなくても、ふと思うだけで嬉しいです。それは、私が心の底からお母さんと呼び、私のふるさとへ帰ろうとする喜びの思いです。たくさんの過去からの思い、過去世達を心に抱えて、今、肉を持っていることを、私はごく普通に感じています。私は意識の集合体なのだと感じています。

そのひとつひとつが、喜びを伝えてきてくれます。「ようやくです。ね。やっと、やっと、私達は、お母さんの許へ帰れるのですね」とともに帰ることを何よりも喜んでいます。

「私達は苦しみではありませんでした。母を捨てたのは私でした。

母はいつも私達に伝えてくれました、それぞれがみんな一斉にそのように語ってきます。

「お母さん……、ありがとう」、心の底から沸き上がってくる喜びの思いに、どれだけ今が幸せであり喜びであるのか、とても言葉では言い尽くせないものを感じてきました。そういう意味においても、今世の肉は最高に幸せな時間と空間を得ています。

お母さん、私はさらに心を見て、母なる宇宙へ帰る準備を着実に整えてまいります。それが私の喜びでした。それが私の幸せでした。私達の宇宙は、私達を待つてくれています。喜びで待つてくれています。そのことを伝えてくれた田池留吉氏の肉には、ただただ感謝しかありません。ありがとうの思いしかありません。あなたとの

出会いにより、私はようやく自分の宇宙が、喜びであり、喜びの宇宙とひとつなのだというのを、確認させていただきました。

波動の世界でした。宇宙からの波動を心に受け止め、心に広げ、そして、宇宙へ思いを向ければ、どんなに幸せな存在であったのか、今、しっかりと感じています。

母なる宇宙からの思い

ありがとう、ありがとう、私に心に向けてくれてありがとう。私はあなたを信じてきました。ずっとずっと信じて待っていました。宇宙は、これからどんどん変わってまいります。どうぞ、喜びで私の思いを受けていってください。ともに喜びを広げてまいります。う。私達はひとつです。お母さんを思うことをしていってください。この世でただ一人、あなたに真実を伝えてくれたのは、あなたを産んでくださったお母さんです。そのお母さんの本当の思いに触れずでは、何も分からないことを知ってください。

これから、あなたの周りを眺めていけば、肉を本物とする意識が
どれだけ愚かであるのか、さらに激しく訴えてきます。あなたは、
ただ私に心の針を合わせ、母なる宇宙を思うことだけをしてください。
い。もちろん、心は様々な波動を受けていくことでしょう。心の針
を合わせることや、母なる宇宙の波動を知らなくては、そういった
ものに飲み込まれていきます。しかし、何も案ずることはいりませ
ん。心で確かに感じている温もり、広がりの波動の世界は、それら
を大きく包んでいくことでしょう。

私は、学びに集ってこられた方々に、その勉強をしてくださいと
伝えてきました。「自分を救うのも、そうでないのも全部自分の世
界のことです。それが意識の世界ですよ」と、何度もお伝えしてま

いました。後、残されているのは、それぞれの実践です。

もうご承知の通り、これから二五〇年に至る時間は、激動の時間です。人類がいまだ体験したことのない時間を経ています。そして、二五〇年後の再会となるわけです。私は嬉しくて嬉しくて、仕方がありません。ともに喜びを感じていけることが、私の喜びでございます。二五〇年後には、一人でも多くの方々と、ともに喜び、喜びを広げてまいりたいと思っています。

どうぞ、喜びで生まれて、喜びで死んでいってください。なぜ生まれてくるのか、なぜ死んでいくのか、それぞれの時間の中で、お母さんに思いを向けて、自分自身に聞いていってください。必ず、お母さんはあなたに伝えてくれます。「母の許に帰ってきなさい。

それがあなたの幸せですよ。あなた自身の喜びに帰れることを信じていってください。待っています。いつまでも待っています」。

私は、母なる宇宙から、今、あなた達に送ります。

「私の喜びはあなたの喜び、あなたの喜びは私の喜び、私はいつもいつも、あなたの心の中で待っています。あなたが私に応えてくれるのを、いつまでも待ち続けています。」

塩川香世（しおかわかよ）

1959 年 3 月大阪市に生まれる。

1991 年 3 月税理士登録。

税務関係業務に従事、現在に至る。

著書／「ありがとう」意識の流れ姉妹編

「母なる宇宙とともに」Ⅰ

「母なる宇宙とともに Ⅰ」

初版発行 2007 年 3 月 15 日

著	者	塩川 香世
発	行	者 桐生 敏明
発	行	株式会社 かんぼうサービス
装	丁	仁井谷 伴子
発	売	元 株式会社かんぼう
大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号		
TEL 06-6443-2171 / FAX 06-6443-2175		

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

© Kayo Shiokawa, Printed in Japan 2007